

年 組 名前：

農林高 栽培環境変更が奏功

クロアワビタケ
収穫量2倍超に

農林高が授業で栽培しているキノコ「クロアワビタケ」の1回当たりの収穫量が今年、前年の2倍以上と大幅に伸びた。県森林総合研究所が開発した独自品種「山梨夏つ子きの子」で、栽培環境を変えたことが要因とみられる。栽培に携わる生徒は「管理を通してキノコについての理解を深めたい」と話している。

〈雨宮文貴〉

農林高は2019年にクロアワビタケの栽培を始めた。研究所の助言を受けながら、森林科学科の生徒が授業の1環として散水や収穫、重量測定などを行っている。昨年は1回の収穫で3108gだったが、今年は9〜11月に月1回ずつ収穫し、1回当たり6700gを収穫した。

昨年屋外の倉庫で栽培していたが、今年から校舎内の種菌培養室を活用。種菌培養室は倉庫に比べて湿度管理がしやすいという。同校の市川幸介教諭は「湿度を保つことができ、収穫の増加につなげた可能性がある」とみている。

農林高は温度や湿度などの栽培記録を取り、研究所に提供し、研究に役立ててもらおうという。収穫したキノコは校内で販売。来年以降も栽培を続け、授業などで活用する方針。

森林科学科2年の渡辺諒さんは「クロアワビタケの存在は育てるまで知らなかったが、栽培できる機会があるのはうれしい」と話し、中林怜音さんは「キノコの成長がどうなっているのかを調べ、今後の栽培も楽しみ」と語った。

(2024年11月26日付 山梨日日新聞 20面)

問1

農林高が授業で栽培している「クロアワビタケ」の品種を教えてください。

.....

問2

今年は、栽培場所をどこからどこへ変更しましたか。

.....

問3

栽培場所を変更したことで、良かったことを教えてください。

.....

問4

今回の栽培知識を、どのように活用していきたいと考えていますか。

.....